重要文化財　四季花鳥図　狩野元信筆
八幅のうち四幅　室町時代　16世紀　京都・大仙院

六本木開館10周年記念展
天下を治めた絵師　狩野元信

会期：2017年9月16日（土）～11月5日（日）

狩野元信（1477?～1559）は、室町時代より長きにわたり画壇の中心を担ってきた狩野派の二代目です。狩野派とは、血縁関係でつながった「狩野家」を核とする絵師の専門家集団であり、元信は始祖・正信（まさのぶ・1434～1530）の息子として生まれました。元信は極めて卓越した画技を持ち、その作品は歴代の狩野派絵師の中で最も高く評価されていました。また、工房の主宰者としても優れた能力を発揮した元信は、孫・永徳（えいとく・1543～90）や永徳の孫・探幽（たんゆう・1602～74）などへとつながる、それ以後の狩野派の礎を築きました。幕府の御用絵師となった狩野派は、日本絵画史上最大の画派へと成長していきますが、その繁栄は元信なくしては語れません。

狩野派の台頭を支えた大きな要因のひとつに、「画体（がたい）」の確立があります。従来の漢画系の絵師たちは、中国絵画の名家（めいか）による手本に倣った「筆様（ひつよう）」を巧みに使い分け、注文に応えましたが、元信はそれらの「筆様」を整理・発展させ、真・行・草（しん・ぎょう・そう）の三種の「画体」を生み出します。そして、その「型」を弟子たちに学ばせることで、集団的な作画活動を可能にしました。襖や屏風などの制作時には弟子たちが元信の手足となって動き、様式として揺るぎ無い、質の高い大画面作品を完成させました。

また、父・正信は中国絵画を規範とする漢画系の絵師でしたが、元信はさらにレパートリーを広げ、日本の伝統的なやまと絵の分野にも乗り出します。濃彩の絵巻や、金屏風の伝統を引き継ぐ金碧画（きんぺきが）など、形状・技法の導入に加えて、風俗画や歌仙絵など、やまと絵の画題にも積極的に挑戦しました。とくに、それまでやまと絵系の絵師や町絵師が主導していた扇絵制作には熱心に取り組んでいます。

和漢の両分野で力を発揮し、襖や屏風などの大画面から絵巻や扇絵といった小画面にいたるまで、多様な注文に素早く対応することで、元信工房は多くのパトロンを獲得していきました。狩野派は元信の時代に組織として大きく飛躍したといえます。本展では、元信の代表作を中心に、その幅広い画業をご紹介します。また、元信が学んだ偉大な先人たちの作品も合わせて展示し、人々を魅了した豊かな伝統の世界を浮き彫りにします。

第1章 天下画工の長となる ― 障壁画の世界

寺院の発注による襖や壁貼付など、建築の一部に描かれる障壁画は、建物の建設と密接に関連した大規模事業であり、棟梁としての元信の力量が試される場でもありました。障壁画の多くは現在、掛軸へと改装されていますが、その明晰な構図や描写からは、元信が見事な空間演出によって発注主の期待に応えた様子が伝わってきます。また、元信自らが筆を執ったとされる作品群は、棟梁としての才覚だけではなく、絵師としても、他の追随を許さないほどの優れた画技を持っていたことを示しています。

第2章 名家に倣う ― 人々が憧れた巨匠たち

元信は「筆様」ではなく、真体（しんたい）、行体（ぎょうたい）、草体（そうたい）の三種の「画体」を創り出し、元信様式としてマニュアル化することで、一定の質を保った作品群を生み出す土壌を創り上げます。その際、真体は馬遠と夏珪、行体は牧谿、草体は玉澗などが参考にされました。また、人物や花鳥、樹木など個別のモティーフを抜き出し、自身の作品に取り入れた例も見られます。

第3章 画体の確立 ― 真・行・草

寺院や城郭などの障壁画では、公式な接客空間には真体、日常的に使用する私的生活空間には行体や草体が多く用いられました。

山水図 伝 夏珪筆 一幅
中国・南宋時代 13世紀 岡山県立美術館

第4章 和漢を兼ねる

漢画系絵師らしい明快で力強い構図や線描と、やまと絵を思わせる金泥や濃彩を組み合わせた絵巻や扇絵は、元信による和漢融合の最たる例といえます。とくに贈答用品として不特定多数の需要者が見込める扇絵は、元信工房を支える大きな力となりました。また扇絵や「富士曼荼羅図」などに見られる表情豊かな人物描写は、元信がやまと絵風の風俗画にも長けていたことを伝えています。

重要文化財 酒伝童子絵巻 画／狩野元信 詞書／近衛尚通・定法寺公助・青蓮院尊鎮
三巻のうち巻三（部分） 室町時代 大永２年（1522） サントリー美術館

第5章 信仰を描く

正信や元信は仏画も自身のレパートリーのひとつとしていきます。華やかな彩色や世俗的な面貌表現は、それまでの伝統的な仏画とは一線を画すものであり、その独特な表現は仏画というジャンルに新しい風を吹き込みました。

第6章 パトロンの拡大

当時畿内で勢いのあった武将・木沢長政（きざわながまさ）への取りなしを依頼する「玉雲軒宛書状（ぎょくうんけんあてしょじょう）」が残っています。

支持層の拡大は、元信とその弟子たちによる多角的な制作活動を支える原動力となりました。本展を締めくくる本章では、元信をめぐるネットワークの拡がりに注目し、狩野派が画壇の長としての地位を確立していく姿を追います。

六本木開館 10 周年記念展
天下を治めた絵師 狩野元信

会　　期：２０１７年９月１６日（土）～１１月５日（日）
※作品保護のため、会期中展示替を行ないます
休 館 日：火曜日　開館時間：１０時～１８時
※金・土、および10月８日（日）、11月２日（木）は２０時まで開館
※いずれも入館は閉館の30分前まで
主催：サントリー美術館、朝日新聞社
協賛：三井不動産、三井住友海上火災保険、サントリーホールディングス
会場：サントリー美術館　港区赤坂９-７-４ 東京ミッドタウン ガレリア３階
〈最寄り駅〉都営地下鉄大江戸線六本木駅出口８より直結
東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結
東京メトロ千代田線乃木坂駅出口３より徒歩約３分